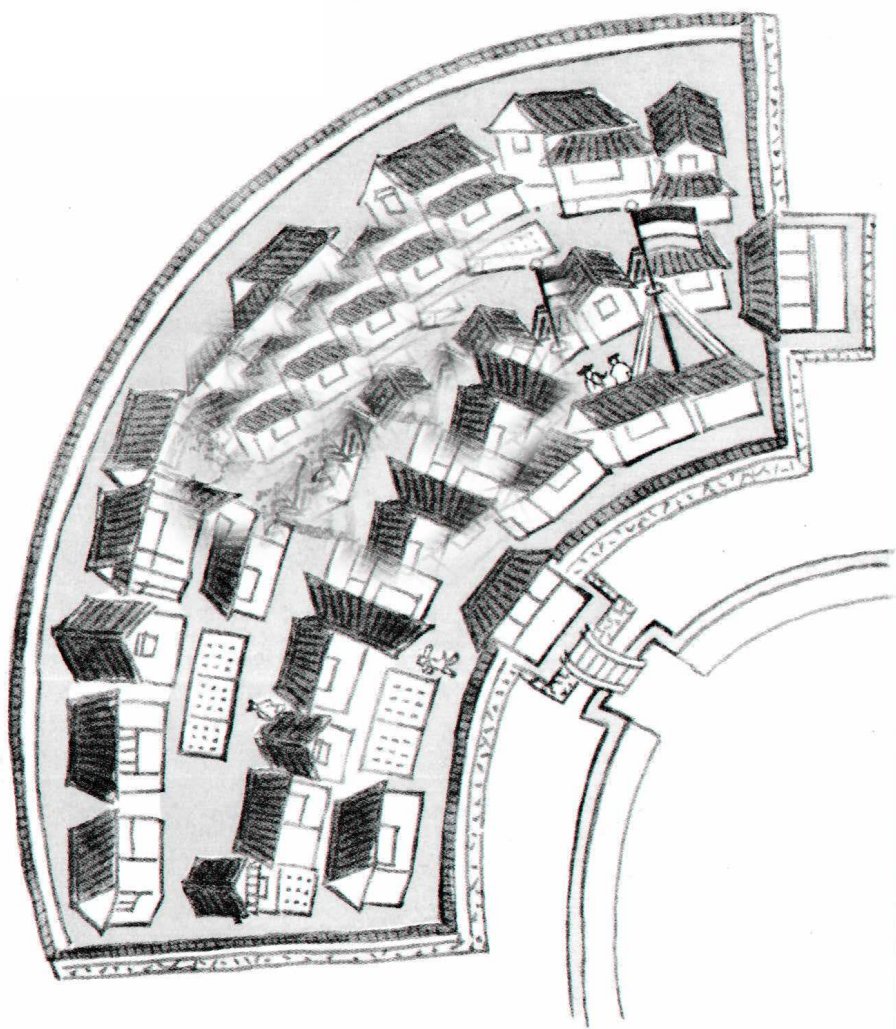


松平長七郎西海日記



松平長七郎西海日記

村上元三



著者の
諒解により
検印廃止

落丁・乱丁の場合は
お取りかえ致します

1963 ©

松平長七郎西海日記

昭和三十八年十一月二十日 印刷
昭和三十八年十一月二十五日 発行

定価 三百五十円

著作者 村上元三
発行者 矢貴東司
印刷者 小泉輝章

発行所 株式会社 桃源社

東京都中央区日本橋筋一丁目二番
電話(六七)四〇〇一、二番
振替東京六四三五一番

目次

主従三人	七
折り鶴慕情	三
印籠盗難	五
血の湯	二
雨後の月	六
白い疾風	四
茶の粉	三
二人目の命	四
挑戦状	四
敵の鼠	五
三人目の命	五
笑う太鼓	六
おのろけ問答	七
雨と血	三
お近は泣く	九

おれん大変	八
拾った命	六
虹の懸橋	四
小間物屋六之助	七
襲うもの	一〇
逃げる男	一〇
長崎屋四郎右衛門	一〇
意外な顔	一七
めぐり合い	二三
壁の中	二三
白い襲撃	一四〇
生きた土産	一四
阿片亡者	一七
阿片の賊	一五
六之助出現	一四
逃げる六之助	一三
あやつる男	一五
前借の枷	一六
星の夜	一五

竜翔号	二八
趙雲飛	二七
謎の武士	二六
声の主は	二五
その正体	二四
竜翔号炎上	二三
藪の入口	二二
二人の血	二一
笑う者	二〇
秘密の抜路	一九
悪を斬る	一八
兵庫守の行方	一七
新たな犠牲	一六
一つの手がかり	一五
その夜	一四
趙雲飛の死	一三
右平次の声	一二
縄目の恥	一一
晴れた空	一〇

装
幀

中

一

弥

松平長七郎西海日記

主従三人

身分の高い武家には違いないが、何とも様子がおかしい、と浪花屋の番頭藤兵衛は、二人の供を連れた武士の顔を一目見て感じた。

俄か雨に降られ、駆け込んで来たのらしいが、その武士は三十年配、顔色が青く、頬がとがつてけわしい眼つきをしていた。

まだ正午をすぎたばかりだから雨宿りのつもりなのであろう。逗留されては困る客、なるだけ早く発つてくれたほうがいい、とは長年の感でとつきに思つたことだが、それでも藤兵衛は、

「お越しやす」

旅籠の番頭らしい愛想のよさでむかえて、

「お近、早うお洗水を」

昨日雇入れたばかりの女中に言いつけると、自分も帳場格子の中から揉手もみでをしながら出て、若党がかついでいた槍を受取った。

「合憎あひにくの雨で、さぞお困りでございましたらう。お二階にしばらくかなお部屋があいておりますよつて、どうぞごゆるりとなさいますよう」

お世辞せじをいつたが、武士はにこりともせず、お近が洗水すすぎの桶をはこんできて草鞋わらじの紐をとこうとするのを、乱暴な手つきで払いのけた。

「あ、わたくしが」

五十年配の下僕は取りなすように言い、振分けを上りあが櫃がまちに置くと、主の足もとにあわててしやがみこんだ。若党もすぐに手を貸したが、二人に足を洗わせている間中、武士はじりじりしていた。眼に落着きがなく膝にのせている両手の指が小さきぎみにふるえているのが、ただの短氣というのではなく、何か病的な感じであつた。

「どこだ部屋は」

下僕げぼくがろくに足も拭かないうちに、武士は上りあが櫃がまちに突つ立上つて、

「煙草たばこ盆ぼんはあるか、煙草盆は。ええ、ぐずぐずせずと早う案内をせぬか、案内を」

そういつたのが、まるで噛みつくような権幕けんまくなので、藤兵衛もつい釣込まれて、せかせかとお近に

いった。

「松の間がええ。ご無礼のないようにな、氣いつけてご案内を」

お近が武士を案内して階段をあがつて行くと、若党と下僕も並んで洗水を使い始めたが、二人が実の親子だとは藤兵衛にもすぐにわかった。

「お父つあん、殿さまのご様子が今日はいよいよ変だが、お医者に診てもらいなされてはどうだろうか」

「さあそれだ、わしも今日こそは思い切つてお願いしようと考えていたところ。それになあ平太郎」
言いかけて、ふつと口をつぐんだ老僕は、藤兵衛を振りかえると、

「あの、ご亭主で」

そう聞いたのが、実直ではあるが何かを怖れている、といった顔つきだった。

「いえ、わたくしは番頭で」

「番頭さん」

訊き返した老僕は、急いで足を拭くと、

「平太郎、お前はさきに殿さまのお部屋へ行きなさい。わしは番頭さんにちよつとお願いがある」

「こちらへどうぞ」

と藤兵衛は、槍を柱へ立てかけてから座布団をすすめ、自分は帳場格子の中へすわつた。

「殿さまはお旗本で柿沢惣之進さま、若党は平太郎、わたしは平作と申します」

そういつた老僕の平作は、藤兵衛がその通りを宿帳へ記すのを待つてから、

「殿さまは短気なご性分、一口にいつて、寄りつきにくいお方とでも申しましょうか。でも、根はいたつておやさしいお方、お叱りをお受けなされても、どうか氣になさらぬようにお願いいたします」

「ご心配には及びません。何でおすか、平太郎さんと言やはるのは、お前さまの息子さんで」

「はい、たつた一人の倅で、親子いつしよに働いたほうが心丈夫でよからうとおつしやつてくだされたのはご先代さまでございました。それが七年前、平太郎の十八の年で、いまの殿さまが中間から若党に取立ててくだされたのは三年前、わたしたち親子は一生かかつてもお返しのできぬご恩を受けております」

「それはそれは」

言いながら藤兵衛が、柿沢惣之進を見直す氣持にふとなつたとき、二階からお近が降りて来た。

「殿さまがお医者を呼ぼうとおつしやつてくだされたら、よろしくお願い申します」

平作はそういつて立上り、入れ違いに階段をあがつて行つた。

「粗相はおまへなんだやろな。お武家はんはどないしやはつた」

と藤兵衛は、お近を目顔で呼んで、ささやくように訊いた。

「それが番頭さん」

昨日来たばかりのお近は、二十三という歳よりも二つ三つは若く見える色白の、ふつくらとした頬に笑窪をのぞかせて、

「はじめはどんなに怖いお客さまかと思いましたが、やさしいお方でした」

「お叱りを受けなかつたか」

「いいえ、でも、あんなに煙草の好きな方ははじめて見ました。部屋に入るなり煙草盆を引きつけて、たてつづけに何服も、それが番頭さん、刀もちゃんとさしたままなのです。そして、まるで人が変つたようににここに笑いだされて、さつきはとなりつけて悪かつたとお詫びまでおつしやいました」

「お詫びを」

と藤兵衛は、ほつとした気持になり、あれこれと気をまわした自分の臆病さがおかしくなつた。

だが、後にして思えば藤兵衛の直感やはりあたつていた。その柿沢惣之進は、浪花屋にとつてはとんでもない厄介な客でしかなかつた。

折り鶴慕情

雨は、夕方になつても降りやまなかつた。

この旅籠浪花屋は、大坂三郷のうち、南の組に属する安堂寺町一丁目にある。

具足屋町から安堂寺橋を渡つてすぐの表通りにあり、上方特有の奥行の深い構えで、庭もひろく、奥の土蔵となり合わせて、八畳の二間からなる離れ座敷もある。

松平長七郎が、お氣に入りの三宅宅兵衛と田村右平次の二人だけを伴い、その離れ座敷の客となつて今日はもう四日目であつた。

さきの駿河大納言徳川忠長卿の忘れがたみ、という身分が大坂城代の内藤豊前守信照にわかれば、またまたわずらわしいことになるので、宿帳にはいつも使う偽名の筑波太郎と記させたが、それがうまくいつて主従三人は誰にも邪魔をされない三日間をすごすことができた。

浪花屋の一人娘で十歳のお絹は、長七郎にすっかりなついて、一日に三度も四度も離れへやつて来ては、無邪気に双六や碁つきの相手をせがんだ。

母親のお須磨が、娘の狎々しさを詫びに来たのは一昨日だが、その母親もまた、主従三人のなごや

かな雰囲氣がうれしかったのだろう、問わず語りに身の上話をしはじめた。

主の多左衛門は五年前に亡くなり、家附の女房お須磨はまだ三十二歳だが、再縁をすすめる人はあつても耳をかさず、番頭の藤兵衛が律儀なので稼業を安心して任せられるのが仕合せ、自分はただお絹の成長をたのしみに暮らしているというのであつた。

「あの娘が父親に死なれたのは五つで、兄妹を一人も持たないさびしい身の上、こちらさまがやさしくしてくださいますので、実の兄さんのような氣にでもなりましたのでしうか。ほんまに相すまんことでございます」

「何の、わしも子供は好き」

とだけ、長七郎は笑顔で答えたが、自分もまた五つのとき父に死なただけに身につまされた。それも駿遠甲三カ国の太守であつたのが、兄の將軍家光から謀反の志ありとの疑いを受け、上野国高崎に流された果の自刃であり、長七郎は二十六歳の今となつてもどうかすると父への思慕と自分自身を哀れむ氣持で、胸をきざまれる思いがするのだつた。

風呂をすませた長七郎が、離れ座敷へ帰つてくると、お絹が色紙で鶴を折りながら待つていた。

赤、青、黄と色とりどりの折り鶴を、二十幾つも並べて、

「綺麗でしうよ、これ」

とお絹は、まつ毛の長い黒瞳勝ちの瞳をくりくりさせて、長七郎をむかえた。

「こんなに沢山こしらえて、どうするのだな」

「筑波の小父さまに上げたら、どないしやります」

「さあ、どうしような」

「家来になされたら。この鶴、みんな忠義をつくします」

お絹は大真面目な顔でいつたが、そういえば鶴の一つ一つにお絹の感情がこもっているように思えて、

「折り鶴が家来か、これはいい」

はつは、と長七郎は明るい声を部屋いっぱいにひびかせて笑った。

「ご前、意外なお人が泊り合せております」

と右平次が、一と足おくれて入ってくるなりいつた。

「誰だな」

「柿沢惣之進なのです」

「ほう」

柳生但馬守宗矩から柳生流を教えられた長七郎は、但馬守の後継者である飛騨守宗冬とは兄弟同様